

若手保育者の「育ち」のプロセス

The process of "growing up" for young caregivers.

石山 佳子

Yoshiko Ishiyama

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：若手保育者、育ち、契機

Keyword : Young caregivers, Upbringing, Opportunity

1. 研究目的

保育の質は保育者の質に他ならない、にも関わらず、保育者不足、保育者の早期離職の問題が指摘されている、(木野ら 2021, 竹石 2013)。

3 年未満での離職は、若手保育者が「育ち」見通しをもって保育に従事できていないことのみならず、就職初期段階から保育を楽しめていないことも意味している。現在勤務する認定こども園では、主幹保育教諭の立場でクラス担任を援助する立場にあるが、こうした問題の背景には、現場の経験則に依拠して若手保育者を育成しているという実感があると共に、育成側の問題として指摘されることも少なくない。(池田 2015, 八代 2022, 石川ら 2020)。

そのため、私の実感にしても、先行研究においても、育成する側と育成される側の両側から考えていく必要がある。

したがって、本研究では、上述したように、若手保育者の「育ち」の契機に視点をあて、その「育ち」のプロセスを見出すことを目的とする。

本研究では、若手保育者の「育ち」の契機を、リーダー保育者との日々のやりとりや日誌等様々な資料から見出し、どのような体験や援助が、その「育ち」を支えているのか、そのプロセスを明らかにしていく。

2. 研究実施内容

研究対象はおおよそ 3 年目の若手保育者 1 名とその指導者となるリーダー 1 名である。1 歳児クラスを対象クラスとした理由は、複数担任の体制の中、保育者間の連携が必要なためである。また、研究フィールドである自園では若手保育者

が担任数の少ない幼児クラスに配属されるケースは少なく、必ず複数担任で構成される乳児クラスへ配置されるからである。さらに、おおよそ 3 年目の保育者が、1 日の保育を振り返る際、リーダーやクラスの同僚たちと対話や記録等の中に「育ち」の契機を見出していきたいからである。

研究方法については日々の振り返りを通じた情報交換、週案、個別経過記録、計画等の打ち合わせ、連絡帳、日誌、お便り、などの記録や録音、また、研究対象である 2 名についての定期的なインタビュー、同じクラス担任への聞き取りなどの調査等を通じて分析していく。

令和 6 年 12 月倫理審査委員会からの承認を得て、令和 7 年 1 月までに対象クラスとなる 0 歳児クラス、1 歳児クラスの保護者、全職員へ研究内容についての文書と口頭での説明をし、同意書を得ている。同意書は写しを保護者並びに職員は配布している。現 1 歳児クラスは本格調査では対象外のクラスとなるが、予備調査では対象クラスとなるためである。今後、新規入園児や令和 7 年度 4 月からの入園児に関しては、0 歳児と 1 歳児クラス両方のクラスの保護者にも同様に研究についての説明をし、同意書を得ていく予定である。同意書が 2 クラスにわたる理由は 0 歳児クラスとともに発達に合わせて活動を決めているため、園児の名前が日々の振り返り等の音声録音に含まれる可能性があるためである。

1 月に同意書を得たあとは予備調査として、対象クラスの日々の振り返りを音声録音し、そのデータを文字起こしして、Excel シートに貼り付ける作業を開始している。調査データを取り始め、当初想像していた以上に音声だけでは聞き取れない

ものも多く、聞き取れなかった部分や状況がわからない部分の聞き取りをして正しいデータをなるように修正している。

クラス内の振り返りはほぼ毎日録音している。しかし、研究対象ならびに対象クラスではリーダーや若手保育者が休みの日や対象のどちらかが会議や配置等の都合で録音データが取れなかった場合に備えて、リーダーと若手保育者との間で交換ノートを準備しているが、現時点で活用されていない。対象者にその活用方法の理由を再度伝えたところである。

また、1 か月ごと、園児一人ひとりに個別の成長記録を作成しているが、リーダーがアドバイスをし修正したあとの記録について、クラス内で読み合わせをしていたため、リーダーと若手保育者間でどの部分について話題になったのか、またアドバイスしたのかが不明であった。そのため、若手保育者が初めに作成したものと完成したものを比較したうえでインタビューを実施していく予定である。

3. まとめと今後の課題

修士進捗状況発表会にむけた、スライド作成が自分自身の研究目的を明確にしていくことになった。その中で予定していた通り、倫理審査委員会から承認を得たあと予備調査に向けてデータを収集することを始めている。

令和7年2月末の時点で、対象クラスの保護者や職員から同意書の取り下げの申し出はない。研究対象が園児自体ではなく、保育者であること、また育成という視点で若手保育者が対象となっているため、研究の目的や研究方法、研究結果の活用について理解を得られたと受け取っている。

令和7年度4月からは入園児の保護者及び新入職員には入園式の日、また、途中入園児に対しては入園日に応じて個別に研究目的を説明の機会をつくり、同意書を得ていく予定である。

これらの同意書の保管について、追加があった場合の対応を含めて指導教員と相談をしていく予定である。

調査データは予備調査として令和7年1月から実際にクラスにボイスデコーダーを渡して振り返りの対話を録音し、データ収集している段階である。録音データは文字起こし、Excel ファイルに日付ごとシートに貼り付けている。まず、その整

理の仕方について指導教員に実際にデータを見せ、その整理の方法についてアドバイスを受けていきたい。

私自身ができることとして、収集されたデータから内容をカテゴリー分けすることを考えている。その後、本研究と同様に録音や記録を取り扱った先行研究の検討にあたっていき、どのような分析方法を用いているのかを探り、比較していきたいと考えている。その結果から、今後の分析方法を導き出せるか検討していきたいからである。

また、調査方法や分析方法につながるものとして、他の研修等への積極的な参加を考えている。令和7年3月は、日本保育者養成教育学会第9回研究大会にて基本講演を聴講し、ポスター発表の参観では、目的を限られた分数の中で説明することや掲示の方法などが参考になった。発表内容の中には園内研修や実習の取り組みなどがあり、人材育成に関わる興味深いものであった。このように、育成に関わる研修等への参加も、他者の視点を学ぶという意味で、研究を進める中で生かしていきたい。

今後の課題として、まず、研究対象者と該当クラス担任が研究目的を把握していくことが必須である。今年度は予備調査であったが、令和7年度から本格調査となるため、対象者とクラスに対して、改めて研究の目的、方法を説明する場を設け、十分な質疑応答を経て研究を進めていきたい。

その理由として、現在録音データで見える限り、日々の振り返り内容が、個人の振り返り中心の傾向にあるためである。これは担任自身が保育を振り返るだけで終わり、研究対象者の体験したことや発言、リーダーが若手保育者に向けた言動などに関する内容がほとんどない。クラス担任にとって、研究対象クラスであること、指導者であるクラスリーダーと共に若手保育者を育てている認識をもって振り返っていくことが求められる。その違いはおのずと対話の内容として表れ、研究目的の理解度・協力の姿勢が調査データに影響を及ぼすと考えられるからである。これら得られたデータを保存する時間の確保、整理の手順が定まっておらず手探り状態であり、現在は効率の悪さを感じているため、この点も改善していきたい点である。

次に、挙げる課題は、私自身が本研究の目的に沿って、調査し分析を経て、結果を見出していくまでの手順が明確になっていないことである。そ

のため、先行研究や図書を参考にし、現時点で収集しているデータ収集の妥当性手順についても整理して必要がある。収集したデータで予備調査をどのように進めていくのか、指導教員と相談をしていきたい。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の令和6年度大学院生研究助成 (B) (課題番号 (DB2404)「若手保育者の「育ち」のプロセス」) を受けたものである。